

# 休校と子どもたちの生活

## おとなのつながりを今

京都・3人の子どもの母親 ● 西郷南海子

### 「休校？ やったー！」

私は京都で3人の子ども（小1、小4、中1）を育てながら、短大で非常勤講師として教育学を教えています。かつ去年からは公立小学校でPTA会長をしています。

2020年2月27日の夜、安倍首相は突然「休校要請」を発表しました。PTAの用事でたまたま学校にいた私は、職員室の先生たちにスマホの画面を見せると、みなさん絶句でした。私は「学校がなくなるってどういうこと？ 誰が子どもの面倒見るとしてるの？ 食事は？ 勉強は？ 居場所は？」と頭の回転を止められないまま翌日を迎えました。

次第にわかってきたのは、今回の休校要請は教育関係者の中で深い議論が行われたわけでもなく、官邸の一部で決まったということでした。こんなふうに、この国に生きる大勢の人たちの生活を左右することが決められてしまうということに、胸がザワザワしました。一方で我が家の子どもたちは、「棚ぼた」のように休みが決まり、「やったー！」という反応でした。その歓声の背景には、今の学校のしんどさがあったのだと思います。

子どもたちを見ていると、毎日宿題が多く、家に帰っても解放感がありません。平日は親子で一緒に過ごす時間は朝晩と限られています。その限られた時間に「宿題やった？」という会話を持ち込まなければならないのも辛いです。「やった？」という声かけには、「どうせまだやってないでしょ？」というジャッジが含まれています。そのニュアンス

を出さずに、宿題に向かわせるのは、とても難しいことです。特に夜の時間帯は、私は家事に追われてイライラしがちです。私の中でも、「子どもは自分にとって意義の感じられないものはやりたくないのだ」という子どもに寄り添う声と、「この社会に生きていく以上、形式的にでも『こなす』能力が求められているのだ」という声のせめぎ合いです。

結局、今回の休校の間もずっとこのせめぎ合いは続くことになりました。しかし休校が始まった当初は、コロナに対する恐怖心と、非日常を経験しているという興奮の入り混じった感情で、あつという間に時間が過ぎていきました。

### 卒業式をめぐって、お母さんたちと

3月も中旬になると、我が家には小学校卒業を迎える子どもがいたので、果たして卒業式が行われるのかどうか気になってきました。そして、卒業式はあるけれども、式の内容は大きく短縮になるという情報が回ってきました。しかも京都市が発表した「式典案」では、国歌斉唱・校歌斉唱はあるけれど、子どもたちの合唱や言葉の交換などは行わないことになっていました。感染予防のためのプログラム短縮であれば、子どもたちだけでなく参列者も歌う斉唱の方が感染リスクは高いのではないか、優先順位が違うのではないかという疑問が頭に浮かびました。そこで子どもの同級生のお母さんたち何人かにLINEで意見を聞いてみたところ、違和感があるのは私だけではないということがわかりました。

切なかったのは、最後となった登校日のことです。1クラスよりも大きな集まりはできないということで、卒業式に歌う予定だった曲を各クラスから廊下に向かって合唱したそうです。長い時間をともに過ごした先生そして同級生との別れがこんなにも突然訪れるとは、誰にも想像できませんでした。

本当にこのままお別れでよいのだろうかという私の思いはますます強くなりました。そしてお母さんたちと相談し、卒業式のプログラム改善を希望する署名を6年生保護者に呼びかけることを決めました。学校に意見を届けるにしても、個人で伝えるだけでは「個人的な意見」になってしまいます。ここは、保護者が実際に名前を連ねることが大切だと思いました。すでに外出自粛の時期でしたので、クラスのLINEグループを通じて、インターネットから署名を集約する方法にしました。すると続々と署名が集まり、半分を超える家庭から署名をいただきました。中には市教委に自ら電話をするお母さんもいました。

もちろん、保護者の中ではこうした取り組みに対して消極的な意見もありました。ただ、感染を広げたくないという点では相違はないので、感染を予防しつつも式典案を見直してほしいという趣旨で署名を学校に提出しました。校長先生も誠実に対応してくださり、「この声を市教委にも届けます」とおっしゃいました。一緒に署名に取り組んだお母さんからは「声を上げることにして本当に良かった」とLINEが来ました。保護者も学校をつくっていく一員であるという手応えをわずかながら感じる事ができた時間でした。結果的には卒業式のプログラムに大幅な変更はなかったものの、歌う予定だった合唱曲をピアノ演奏で流すなど工夫を凝らしていただき、卒業式を終えることができました。

### Stay Home生活と学校からの課題の束

休校が延長されるたびに家に届いたのは、

学校からの課題の束でした。教育活動を止めないよという事は理解できますが、子どもにとっては何のための課題か伝わりません。彼らを代弁するとすれば「もう学校ないんだし、やる意味くない？」ということでしょう。ちょうど3月末には任天堂からゲームソフト「あつまれ どうぶつの森」(略称「あつまれ」)が発売され、我が家の子どもたちは朝から晩までせせとそれに打ち込むようになりました。このゲームが興味深いのは、いわば「暮らしづくり」をテーマにしているということです。無人島を開拓し、家を作って、季節がめぐる中でそれぞれが好きなライフスタイルを追求するという内容です。コロナウイルスによる外出自粛と発売時期が重なったこともあり、販売からたった6週間で全世界1300万本の売り上げを記録しました。

子どもの頃にゲームをしたことがない私は、ゲームを積極的に肯定できずにきました。でも、子どもたちが1日中「あつまれ」に励んでいるのを見ると、学校から配布された課題の束がとても色あせて見えてきました。本当は、子どもたちは「あつまれ」のようなことがしたかったのではないかと…。島の雑草を抜いて花の球根を植えたり、珍しい魚を釣って町の博物館に寄贈したり、果物を育てて住民と交換したり、着たい服をデザインしたり、自らのアイデアで生活を創り出していく。こうした活動は、コロナがなかったとしても、子どもたちにどれほど体験させてやる事ができるでしょうか。今日、街には『ドラえもん』に描かれるような「空き地」すらありません。仮想空間の中でしか子どもたちが自由に遊べない社会になりつつあるといっても過言ではないでしょう。

だからこそバーチャルからリアルへ、ということを私は意識します。休校中は子どもたちからゲームやYouTubeといったバーチャルを取り上げるのではなく、それらの中で子どもたちが何に興味をもっているのか観察

し、それらを実生活に還元していこうと考えました。たとえば、子どもたちがくり返し見ている動画に、ひたすらお魚をさばいていくというのがありました。最近の子どもたちはこんなものが好きなのか！と驚きました。これはチャンスだとスーパーでお魚を買ってきて、実際に子どもたちとさばいてみました。振り返れば、普段の忙しい生活では、せいぜい切り身を焼くことくらいしかできていませんでした。しかもスーパーではお肉の方が安いことが多いので、海に囲まれた国なのにどうしてこんなに暮らしとお魚が離れてしまったんだろう？という話もしました。食べ物は政治や経済と直結しています。そんなことも食卓の「ネタ」になるのです。

このように私なりにStay Home生活の工夫を続けた一方で、学校からの課題はどんどんたまっていきました。「学びを止めるな！」というかけ声のもと、私学などではオンライン授業が行われているというニュースも入ってきました。率直に言って「このままでは置いていかれる」「差が開く」と感じずにはいられていませんでした。子どもたちにはせめて課題くらいはやってほしいけれど、外出自粛の中、24時間同じ家で過ごしている母親である私が、学習面でもガミガミ言い始めたら、子どもたちの居場所がなくなってしまう。今は子どもの心と身体の健康が最優先だ、と自分に言い聞かせました。

## PTA「子どもの生活アンケート」を実施

4月から5月にかけては、1週間に1度の買い出しのたびに、街路樹の新緑の成長に目を見張りました。私たちが家に閉じこもっているあいだにも季節はめぐっていくのです。私も何かしなければという気持ちになり、PTAの本部役員のメンバーに「休校中の子どもたちの生活に関するアンケート」をやってみないかとLINEで相談しました。すると、やろう、やろう！という反応で、あっという

間にアンケートが出来上がりました。

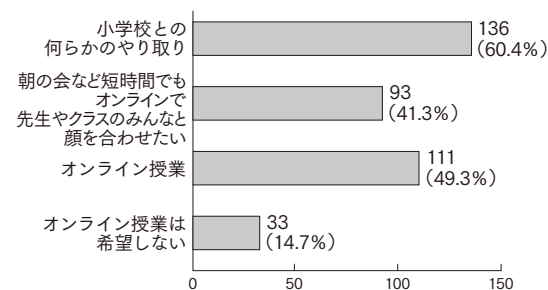
アンケート回収はGoogleフォームで行い、そのリンクをPTAメールで各家庭に配信しました。学校やPTAからのメールは形式的な文面になりがちですが、ここはコロナ禍での先の見えなさや不安に寄り添う文面にしたいと思い、私なりのメッセージを込めました。するとアンケート開始からほんの数分で続々と回答が到着し、なんと2日間で約3分の2の家庭から回答が集まりました。いろんな思いがそれぞれの家庭にたまっていたことがすぐにわかりました。

アンケート結果を見ると、次のように特徴的なことが浮かび上がってきました。

- ①多くの家庭(82%)にはWi-Fiがあり動画視聴などには問題がない
- ②ただしオンライン授業を求める声は過半数には届かない
- ③むしろなんらかの形での「学校とのやり取り」を望んでいる

### Q4. 休校中にあると嬉しいサポートについて(複数選択可)

225件の回答



確かに学校からは定期的に課題が配布されますが、この休校をどのようにとらえたらよいのかという「メッセージ」や「コミュニケーション」は不足していたように思います。

自由記述欄は、それぞれの家庭での戸惑いの声であふれていました。子どもが課題に取り組もうとしないという我が家と似た悲鳴もあれば、その反対に子どもがすぐに課題を終えてしまって暇を持て余しているというもの

もありました。悩みの内容としては違いますが、いずれも子ども一人ひとりに合った学習ができていないということでは一致していました。また、子どもの運動不足を心配する声や、「外出自粛」をめぐる家庭間の認識のズレがトラブルになっているケースもありました(公園の利用方法や、お友だちが遊びに来てしまうといったもの)。中には「親子で孤立しています」という切迫したコメントもあり、匿名でのアンケートだったので支援につなげないことをもどかしく感じました。

寄せられたのは不安だけではありませんでした。校庭開放や分散登校といった具体的な提案を書き込んでくださった人も多く、それらすべてを含むアンケート結果を印刷して、ゴールデンウィーク明けに学校に提出しました。また、アンケート結果と分析をPTAホームページで公開し、「同じ悩みを持つご家庭がとて多いことがわかります。『一人で抱え込まなくていい』と思える情報共有になれば幸いです」というメッセージを掲載しました。

学校とはすぐに話し合いの場を持つことができ、校長先生とPTA本部メンバーでじっくり意見を出し合いました。その中でわかったのは、学校も市教委の決定を待つしかない部分が多く、しかもその決定が頻繁に変わるので、とても大変そうだったということでした。学校の現状を知り、帰り道では本部メンバーも「うーん、いったい何だったらできるんだろう」と途方に暮れてしまいました。でも、これまで「学校づくり」の外側にいた私たちがこうして動き出していることは画期的だし、コロナ休校でいったんすべてが宙に浮いてしまったからこそ、誰もが「学校とはどんな場所であってほしいか」を問い直せるチャンスだと思いました。

## どんな学校を「再開」させたいのか

考えてみれば、「教育を受ける権利」とは妙な言葉です。「受ける」というのは、ある意味

で受動的な状態に自分を置くことです。受動的な状態に自分を置くことが「権利」であるというのは、どういうことなのでしょう(少し調べてみたところ、「教育を受ける権利」という言葉を「教育への権利」と言いかえる動きもあるようです)。こんな哲学的(?)な問いに行き当たってしまったのも、休校中の我が子たちのようすを見ていて、肝心の子どもは自分にそうした権利があると認識しているのだろうかと思ったからです。本人以外の人間が主張する場合、それは本当に「権利」たりうるのか、親のエゴではないかという疑問が生じてきました。

私は「あなたには教育を受ける権利がある」ということを子どもに伝えたことがなかったのも、試しにお兄ちゃん(中1)に説明してみたところ、「そんなこと考えてるやつ、ほぼほぼおらんやろ」と言われてしまいました(笑)。この休校中に私が考えていたのは、子どもには教育を受ける権利があるが、親には子どもに教育を受けさせる義務があるという、この関係の「すれ違い」についてだったということが出来ます。

日本において「教育を受ける権利」は、主には在日外国人の子どもたちや不登校をめぐる問題の中で議論されてきたという経緯があります。しかしコロナ休校を通じて、実は「教育を受ける権利」は誰にとっても自明ではないということがわかりました。ここからは、単にコロナ以前の学校を取り戻そうとするのではなく、私たちが再開させたい学校とはどんな場所なのか、1人でも多くのおとなと語り合いたいです。そして、うちのお兄ちゃんがこの言葉をポツリとつぶやいた瞬間を忘れないでいたいです。

「俺、そろそろ学校行きたくなってきたわ」

### さいごう・みなこ

1987年生まれ。京都大学大学院でアメリカの教育学者デューイを主題に博士号を取得。関西の短大で保育科目の非常勤講師を務める。絵本に「だれのこどももこころさせない」(浜田桂子さんと共著、かもがわ出版)。